

[道 徳]

自他のよさを認め、よりよい生き方を求める生徒の育成 — 全教育活動で取り組む道德教育の推進 —

江口 彰子*

1 問題の所在

青少年の痛ましい事件の多発や将来に希望をもてない中高生の増加により、学校における道德教育に対する社会の期待はますます高まっている。教育界の動向を見ても、平成18年に行われた教育基本法の改正により、教育の目標に「道德心を培う」ことが明記され、平成24年度から全面実施されている中学校学習指導要領においても道德性の育成が重視されている。

文部科学省が行った「義務教育に関する意識調査」(2008)の結果によると、中学生が考えている「学校教育で身につけることが『とても必要』と考えている力」の上位二つは、「よいことと悪いことを区別する力」、「まわりの人と仲よくつき合う力」であった。このことから中学生は、自分を取り巻く社会や周囲の人とうまくかかわりながら、人間としてよりよく生きたいという願いをもっていることがわかる。しかし、近年では他者と上手くかかわれないために、自分を表現できなかつたり、新たな人間関係の構築に不安を抱いたりする生徒の姿が多く見られる。中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」(2008)では、その背景に核家族化や都市化の進行などによる社会状況やライフスタイルの変容、それにより家庭や地域の教育力が低下し、それに伴い児童が親や教師以外の地域の大人や異年齢集団との交流、自然体験が減少したことが挙げられている。つまり、人とかかわる力の脆弱化は、人とかかわる機会や豊かな体験活動の不足が一因だと考える。当校の生徒も、狭い地域、限られた環境で生活しているため、保育園・小学校を通して人間関係が固定化されやすく、そのため、自分自身の本当の気持ちや考えを表現できなかつたり、新しい人間関係を築くことへの不安を訴えたりする生徒が多く見られる。そして、固定化した人間関係が学年が進んでも変わらないため、自己肯定感や自己有用感があまりもてずにいる生徒とリーダーで活躍する生徒とに分かれる傾向がある。また、自らの課題と直面することを恐れ、困難な事態を避けようとする傾向が強いことも当校生徒の特徴である。

そこで、当校生徒に人間としての生き方を深く追求させるためには、人とのかかわりや体験活動を踏まえた道德教育の一層の充実が必要であると考える。中学校学習指導要領解説道德編(2008)においても、「子どもたちが、他者、社会、自然・環境との豊かなかかわりの中で生きるという実感や達成感を深めてこそ健全な自信が育まれる。そのためにも、学校の集団生活の場としての機能を十分に生かし、道德教育の一層の充実を図らなければならない」と述べられており、日常生活や体験活動を踏まえた道德教育の充実によってこそ、自己と他者とのかかわりにおける人間としての在り方や生き方の追求が可能になるとしている。

また、これまで当校では、人との望ましいかかわりをねらいとした取組が多岐にわたっていた。しかし、それらは事例対処的であり、中学校学習指導要領第1章総則(2008)で述べられるような、「学校における道德教育は、道德の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うもの」にはなり得ていなかった。その原因は、道德とその他の教科、領域との間に密接な関連が図られたカリキュラムの指針や具体的モデルがなかったことにあると考えられる。現在、道德教育においては「生命尊重」や「規範意識の育成」を期待したカリキュラム開発が行われている。しかし、道德の内容項目の四つの視点を網羅したカリキュラムは多くは存在しない。そこで、道德教育を中核に据えたカリキュラムを作成し、それをもとに日常生活や体験活動を生かした道德の授業の工夫を行うことが「自他のよさを認め、よりよい生き方を求める生徒」の育成に結び付く提言となり得ると考える。

* 上越市立清里中学校

2 研究の目的

本研究では、総合的な学習の時間や特別活動における体験活動等と道徳的実践力の育成を目指す道徳の時間とを関連づけたカリキュラムの開発と学習活動を実践することにより、自他のよさを認め、よりよい生き方を求める生徒の姿が具現化することを明らかにする。

3 研究の内容・方法

研究の目的を達成するために、道徳教育を全教育活動の中核に据えたカリキュラムを作成し、補充・深化・統合を意図した道徳の時間を創造した。

(1) 視覚的カリキュラム表¹⁾の作成

道徳の時間とそれ以外の道徳教育との密接な関連を図るためには、各教科、総合的な学習の時間及び特別活動の特質に応じて行う道徳教育との関連が明確でなくてはならない。つまり、道徳教育を全教育活動において意図的・計画的に行うためには、全教育活動の内容を道徳教育の視点で見直し、整理しなくてはならない。そこで、全教育活動の内容や時期、そしてそれぞれの関連性を道徳の内容項目の四つの視点【①主として自分自身に関すること（自己）、②主として他の人とのかかわりに関すること（他者）、③主として自然や崇高なもののかかわりに関すること（自然・崇高）、④主として集団や社会とのかかわりに関すること（集団・社会）】から捉え直し、視覚的カリキュラム表として分かりやすく編集し直した。また、全教育活動が道徳の時間を中核として機能するように、各教育活動と道徳の時間で扱う内容項目の時期が合致するように配列を工夫した（図1）。

また、体験的な活動の振り返りを道徳の授業と関連づけて行うこととし、視覚的カリキュラム表では、一目で関連が分かるよう矢印で示した。また、全24の道徳の内容項目のうち当校の重点項目【②主として他の人とのかかわりに関すること】を9月から11月にかけて8時間を集中して配列した。

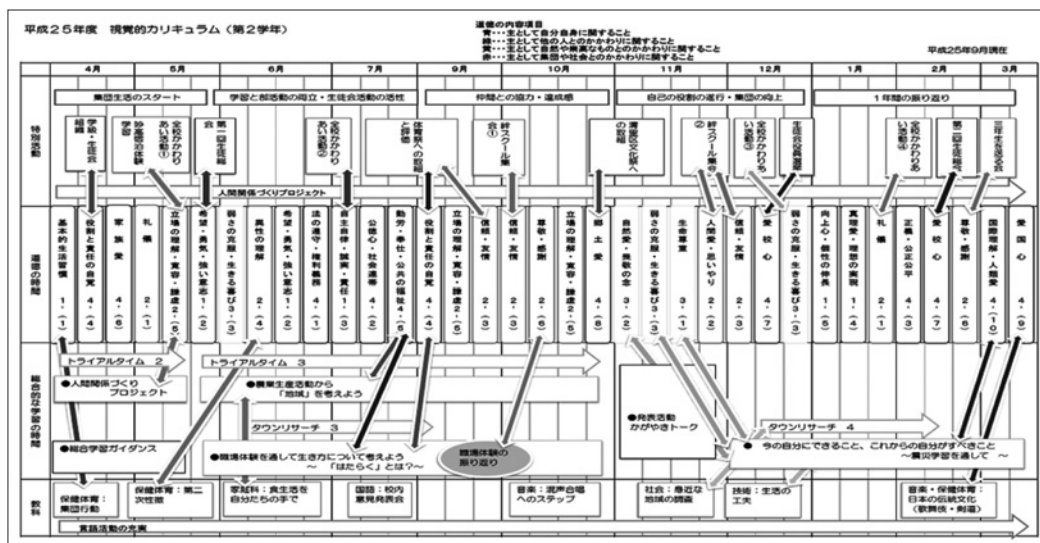


図1 視覚的カリキュラム表

(2) 道徳性を育成する教育活動の工夫

道徳教育の目標は、中学校学習指導要領第1章総則に、「学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うこと」と示されている。そのためには、道徳的価値の自覚を深め、自分なりに発展させていくことが必要となる。そこで、本研究では全教育活動において「かかわる」、「語る」、「見つめる」という三段階の学習活動を実践することで、道徳性の育成を目指すこととした。

- 「かかわる」とは、日常活動や体験活動を通じた「ひと・もの・こと」とのかかわりである。中でも、自分を取りまく人々とのかかわりを通して、様々な道徳的価値について感じたり考えたりする機会を設定する。
- 「語る」とは、自分の体験や経験をもとに自分の思いや考えを語ることである。しかし、そのためには共感的な態度で他者の思いや考えを聴くことが重要であり、他者の考えに自分の考えを重ねることが必要である。かかわりを通して生徒が学んだ道徳的価値について、補充・深化・統合させる役割を担う。

○「見つめる」とは、自己の内省を意味する。自分自身の行動を振り返り、その意味や価値を深める姿、自分自身を見つめ、よりよい生き方を求める姿を創造する。

(3) 補充・深化・統合を意図した道徳の時間の指導過程の創造

今回の学習指導要領の改訂では、生徒の道徳的価値の十分な獲得と道徳的実践力の向上をねらい、各教育活動で行われる道徳教育を補充・深化・統合する道徳の時間の授業の創造が示されている。そこで、道徳の時間においても「かかわる」、「語る」、「見つめる」という三段階の学習活動を踏まえた授業を構成した(表1)。

① 「かかわる」を生かした授業

生徒は日常活動や体験活動のかかわりの中で、様々なことを感じたり考えたりしている。かかわりから得た道徳的価値を補充・深化・統合させるために、総合的な学習の時間や特別活動と関連をもたせながら授業を構想し、自己の体験や経験を授業の導入や終末で想起させながら展開した。

② 自分の思いや考えを「語る」授業

道徳の時間では、生徒が積極的に参加し、自分の思いや考えを自由に述べながら、自らの問題として道徳的価値を捉え、意欲的に学習していこうとする態度を育てたい。そのためにワークシートやホワイトボードを活用しながら、自分の思いや考えを語ったり、他者の考えを聴いたりする活動を授業の中心とした。小グループやペアで語り合うことにより、新たな価値との出会いや価値の変容・再構築を期待した。

③ 自分自身を「見つめる」授業

道徳の時間において、ねらいとする道徳的価値の自覚や自己の生き方について考えを深めるためには、一人一人の生徒がねらいとする道徳的価値を視点に、現在の自分自身を振り返る時間が必要である。そこで、授業の終末では、他者との交流によって深められた道徳的価値に照らし合わせながら、今までの自分やこれからの自分について振り返る時間を設けた。

表1 道徳の時間の指導過程

	段階	展開	生徒の姿	手立て
新たな価値との出会い 価値の変容・再構築	かかわる	導入	自己の体験や経験を想起し、日常生活や体験活動でのかかわりから得た道徳的価値を自分のこととして捉え直す。	体験活動等を想起させるための資料提示
	語る	展開	中心発問では、自分の思いや考えを語ったり、他者の考えを聴いたりしながら、ねらいとする道徳的価値について考えを深める。	見方・考え方を広げる話し合い活動 ・小グループ・ペアの活用 ・ホワイトボード・ワークシート・板書や発問の工夫
	見つめる	終末	これまでの自分の考え方や行動について道徳的価値とのかかわりから振り返る。これからの自分の在り方や生き方について考える。	今までの自分とこれからの自分について「書く」活動

(4) 教科・総合的な学習の時間・特別活動における取組

① 各教科における取組

各教科においては、言語活動を充実させ、生徒一人一人が自分の考えや思いを堂々と発表できるような授業を目指した。また、話し合う場面の設定、課題解決型学習の実施、受容的・共感的な風土づくりを重点的に行った。

中学校学習指導要領解説道徳編において、道徳教育の目標に基づき、道徳の時間などとの関連を考慮しながら、各教科の特質に応じて適切な指導を行うことが示されている。国語科においては、「国語による表現力と理解力とを育成するとともに、人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら言葉で伝え合う力を高めることが、道徳教育を推進する上で基盤となる」。そこで、国語科では、毎年7月に校内意見発表会を実施している。国語科としてのねらいだけでなく、「人間としての在り方や生き方について考える」という道徳的視点を加えて目標を設定し直した。意見文のテーマを「自分と向き合う」とし、他の人とかかわりや自分の経験・体験を通してじっくりと自己と向き合う機

会とした。また、社会科においては、「公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」ことが示されている。そのための学習活動のひとつとして、各学年の授業では平和学習に力を入れ、上越市広島平和記念式典派遣事業や修学旅行（震災学習）の事前事後学習を通して、世界平和と人類の幸福 [4- (10) 国際理解・人類愛] の実現に努める態度の育成を目指している。

② 総合的な学習の時間における取組

当校の総合的な学習の時間は、全体テーマを「地域を見つめ、地域の未来を考える」と設定し、目指す生徒を「生まれ育った郷土を愛し、郷土に貢献できる生徒」「自己の生き方について考える生徒」としている。

中学生の時期には、人間に対する関心のもち方、問題意識などが大きく成長し、人間の生き方や在り方にかかわる諸問題への追求が可能になってくる。人間の生活をより豊かにするものとしての歴史的・文化的環境へと追求を広げ、人間らしい生活を維持していくための方途が探られるよう、横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して道徳性の育成を図る。

2年生では、農業生産活動（図2）や職場体験での学びを [4- (5) 勤労・奉仕・公共の福祉] [2- (6) 尊敬・感謝] 等の道徳的価値と関連付けながら学習を進めている。また、3年生では、保育園児や高齢者とのかわりを通して、地域のために自分たちができることについて考えを深め、人間愛の精神や思いやりの心 [2- (2) 人間愛・思いやり] についてじっくりと考えたり、自己の活動を振り返ったりする場面を設定している。



図2 農業生産活動

③ 特別活動における取組

特別活動は、道徳の時間に育成した道徳的実践力について、よりよい学校や学級の生活や人間関係を築こうとする活動の中で実際に言動に表すとともに、集団や社会の一員としてのよりよい生き方についての考えを深めたり、身に付けたりする場や機会でもある。例えば、当校では体育祭を道徳的実践力を育成する大きな機会と捉え、「友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合う態度を育む [2- (3) 信頼・友情]」や「自己や所属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める態度を育む [4- (4) 役割と責任の自覚]」をねらいとして実施した。体育祭の活動後は、自分自身でじっくりと振り返る時間を設け、その後、活動を通して見つけた友達のよさや頑張りやを伝え合う活動を縦割り班で行った。

また、「人間関係づくりプロジェクト」を立ち上げ、仲間づくりを積極的に行い、人とかかわる楽しさや難しさを経験し、望ましい人間関係の構築を目指した（図3）。全校縦割り班で学校行事や宿泊体験を実施し、仲間との豊かなかわりを通して道徳性の育成を目指した。この活動では、他の人とのかわりから、人の心の痛みや素晴らしさを感じ取り、自分もまたかけがえのない存在として自覚し、自らを高め、自分らしい生き方を求めることを期待している。さらに、「地域貢献活動」として地域の方々やと触れ合い、地域の活性化に貢献する活動にも力を入れている。



図3 人間関係づくりプロジェクト

4 実践の結果と分析

(1) 「学校生活アンケート」結果（平成25年4月～9月の平均値）から

毎月実施しているアンケートから、以下のような結果が得られた（図4）。

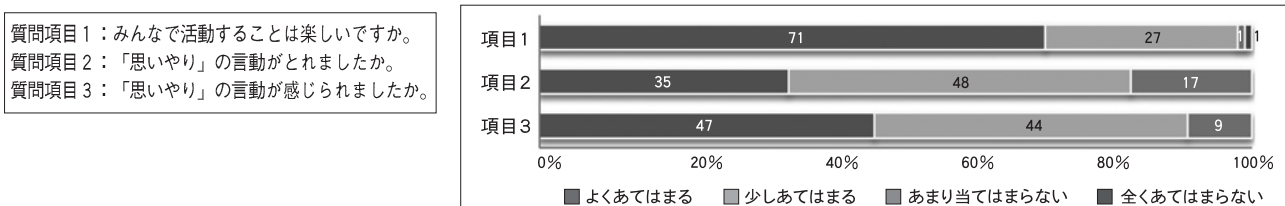


図4 学校生活アンケート

「学校生活アンケート」の結果において、「みんなで活動することが楽しい」の項目に対して、肯定的評価が98%、「思いやりの言動がとれた」の項目に対しての肯定的評価が83%、「思いやりの言動が感じられた」の肯定的評価が

91%であった。これは、様々な体験活動を通して感動や達成感を共有し、互いのよさを認める活動を意図的に仕組んだ結果であると考えられる。したがって、これらの体験活動や人とのかかわりによって得た道徳的価値の意味や大切さを深く考えるために、総合的な学習の時間や特別活動と関連をもたせながら授業を構想することが重要であることが再確認できた。また、道徳教育を教育活動の中核に据えたカリキュラムを開発することにより、生徒の様々なかかわりを効果的に生かした道徳教育が展開されたと考えられる。

(2) 「道徳」の時間についてのアンケート結果（平成25年9月）から

「道徳」の時間についてのアンケートから、以下のような結果が得られた（図5）。

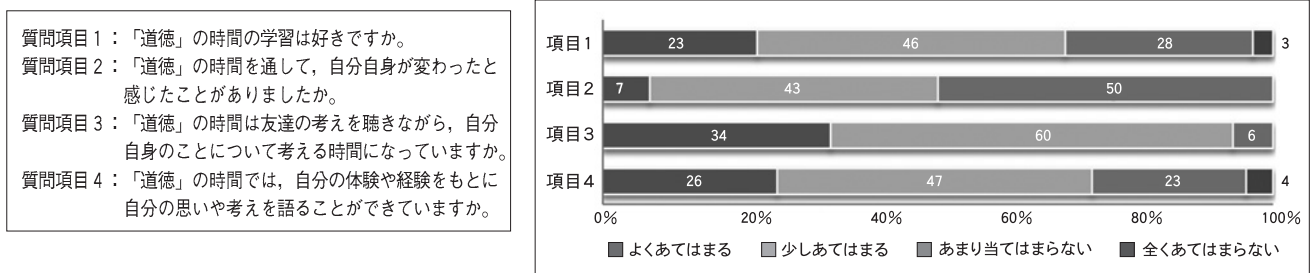


図5 「道徳」の時間についてのアンケート

[質問項目1の主な理由]

- 他の教科と違って正解や不正解がなく、他の人の考えを聴いている学べるから。
- 班での話し合いが好きだから。 ○自由に意見が書けるから。 ○みんなの考えによって自分が変わるかもしれないから。
- 自分自身のことをしっかりと考え、振り返ることができ、さらに様々な人生のお手本を知ることができるから。
- △書いたり、発表したりするのが苦手だから。 △自分で考えなくてはいけなから。考える内容が難しい。
- △話し合いが上手くいかないときがある。

[質問項目2の主な肯定的理由]

- 友達の良い考えに感心するようになった。 ○真剣に物事について考えるようになった。
- 振り返りを面倒くささらずにできるようになり、今までの自分を見つめ直し、改めようと思った。
- 物事を多面的に見られるようになってきた。
- 最初は思ってもいないことを書いていたけど、最近は自分の気持ちと素直に向き合えるようになってきた。
- 真剣に生きようと思った。 ○相手のことを考えて行動できるようになった。

文部科学省「義務教育に関する意識調査」（2008）においては、道徳の時間が「とても好き」「まあ好き」と回答している生徒は約39%である。安易に比較することはできないが、当校のアンケートにおいては69%と高い数値を示しており、生徒が道徳の時間の学びを肯定的に評価していることがわかる。その理由として多く上げられたのが、「発言における自由度の高さ」と「意見交流による学び」という二点である。また、「道徳」の時間において、自分の体験や経験をもとに自分の思いや考えを語ることができていると考えている生徒も73%に及ぶ。これらのことから、生徒は道徳の時間の特質を十分に理解し、友達の良い考えを通して学びを深めているものと考えられる。

道徳の時間において道徳的実践力を育成するためには、道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深めることが重要である。人間としてよりよく生きる上で大切な道徳的価値を自分のこととして深く感じたり、考えたりするためには、その価値の大切さを理解し（価値理解）、実現の難しさを知り（人間理解）、多様な感じ方・考え方があることを理解（他者理解）しなくてはならない。そのためには、安心した環境と温かい人間関係の中で自分の考えや思いを素直に表現し、学び合うことが必要不可欠である。アンケートの結果から、道徳の時間をはじめとする各教科や領域等において「語る」活動を継続的にを行い、自己の心情・判断を表現する機会を充実させることは、道徳的実践力を身に付ける上で効果的な方法であると言える。

今回の学習指導要領の改訂では、道徳の時間の目標に、道徳的価値に加え「人間としての生き方についての自覚を深める」ことが付加された。これは、道徳の時間で生徒一人一人が自分とのかかわりの中で道徳的価値をとらえ、自分自身を振り返ることで道徳的価値を自分なりに発展させていくような授業を組み立てることが求められている。本研究に

においては、授業の終末の書く活動を通して自己の内省を図る場面を設けた。その結果90%以上の生徒が「道徳」の時間は自己について内省する時間であるという認識をもち、半数の生徒が自分自身の考え方や態度についての変化を感じ、道徳的成長を実感していることがうかがえる。

自己の生き方を考える上では、道徳的価値を自分のこととして感じたり考えたりすることが必要である。そのためには、授業の中での読み物資料を単に読み物の中の話としてとらえるのではなく、自分との「かかわり」、つまり、これまでの自分の経験やその時の感じ方、考え方と照らし合わせながら道徳的価値をとらえ、「語る」ことにより道徳的価値を深め、「見つめる」ことにより自己理解を深め、自分なりに発展させることへの思いや課題を培うことが重要である。

5 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究から得た成果

前章で得た、自他のよさを認め、よりよい生き方を求める生徒の姿へと変容した要因の要件をまとめる。

- 道徳教育を中核に据えた視覚的カリキュラム表を作成し、総合的な学習の時間や特別活動における体験活動等と道徳的実践力の育成を目指す道徳の時間を関連付けながら道徳教育を推進する。
- 各教科、特別活動、総合的な学習の時間における体験活動や人とのかかわりの活動を充実させる。
- 道徳の時間のよさや特質を生徒に十分に理解させる。
- 「かかわる」、「語る」、「見つめる」という三段階の学習活動を意識した道徳の時間の指導過程を展開する。特に、小グループ等を活用しながらの話し合い活動や終末での内省の時間を十分に確保し、充実させる。

今後、これらの要件を大切にしながら、道徳の時間を要とする全教育活動で取り組む道徳教育の一層の充実を図りたい。そうすることで、自他を大切にしながら、よりよい生き方を模索し続ける生徒を育成することが可能になると考える。それは、同時に生徒一人一人が自分の将来に夢や希望をもち、たくましく生きる力を育むことにつながっていくと考える。

(2) 今後の課題

生徒の道徳性を育成するためには、さらに以下の点について考慮する必要がある。

- ・道徳の時間で見られる生徒の姿や振り返りからは、道徳的心情、道徳的判断力、道徳的実践意欲や態度といった生徒の内面にかかわる成長が感じられた。しかし、そのような内面と日常生活で見られる行為とは乖離が見られ、道徳的習慣や道徳的行為などの表出されるべき行動についてはまだまだ不十分であるため、実践を継続する。
- ・学校の道徳教育の指導内容が生徒の日常に生かされるようにするためには、家庭・地域との連携が必要不可欠である。家庭や地域社会が道徳教育に果たす役割を十分認識し、協力体制を整えるとともに、具体的な連携の在り方を模索していく必要がある。
- ・道徳の時間は主として学級担任が計画的に進めるものであるが、指導に際して全教師が協力し、指導体制を一層充実させることが必要である。そこで、他の教職員とのチーム・ティーチング等を活用し、道徳教育推進教師を中心としながら効果的な指導方法を模索していく必要がある。

引用・参考文献

- ・文部科学省 2008 『中学校学習指導要領』
- ・文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説道徳編』
- ・文部科学省 2005 「義務教育に関する意識調査」
- ・文部科学省 中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」
- ・金光靖樹 2007 「大阪教育大学紀要 第IV部門 第56巻 第1号 39～51頁」
- ・林泰成・白木みどり 2010 『人間としての在り方生き方をどう教えるか～小中高12年間を通じた道徳教育・キャリア教育～』教育出版
- ・赤堀博行 [編者] 2010 『心を育てる要の道徳教育 補充・深化・統合へのアプローチ』文溪堂
- ・赤堀博之 2010 『道徳教育で大切なこと』東洋館出版社

注1) 視覚的カリキュラム表とは、上越市の全小・中学校で活用されているカリキュラムマネジメントのためのツールである。年間のカリキュラムの実践・評価・改善の営みが可視化されることにより、見通しをもった取組を目指している。